

小 学 校

令和5年度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	3
IV	研究構想図	4
V	研究の方法と内容	5
1	基礎研究	5
2	検証授業	
	低学年(第2学年)	5
	中学年(第3学年)	8
	高学年(第6学年)	11
3	検証資料	14
VI	研究の成果と課題	16

研究主題

自分の考えが伝わるように書く指導法の工夫 ～文章全体の構成や書き表し方などに着目して、 文や文章を整える活動を通して～

I 研究主題設定の理由

予測困難なこれからの時代において、児童・生徒には、自らの個性や能力を伸ばし、様々な困難を乗り越え、人生を切り拓くことができるようにしていくことが必要である。「東京都教育施策大綱」（東京都教育委員会 令和3年3月）では、『『未来の東京』に生きる子供』に求められる資質能力の一つとして、「文章の意味を正確に理解する読解力、授業で学んだ知識を活用して自分の頭で考え、その考えを表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し、新しい答えを生み出す力などを身に付ける」ことが示されており、国語科で果たす役割は大きい。

そのような中、「令和4年度全国学力・学習状況調査 報告書」（文部科学省）（以下、「全国学力調査」と表記。）では、東京都の正答率は、「話すこと・聞くこと」69.1%、「書くこと」51.3%「読むこと」72.1%であった。「書くこと」の正答率は他領域に比べて低く、課題といえる。「書くこと」の領域に関する設問をみると、「文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整える」設問（小学校国語「書くこと」3設問一）において、東京都の正答率は63.6%、無解答率は4.1%であった。また、「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよい所を見付ける」設問（小学校国語「書くこと」3設問二 記述式）において、東京都の正答率は39.0%、無解答率は17.4%であった。以上の調査結果からも、小学校学習指導要領国語の指導事項「B 書くこと（1）オ」（推敲）、「B 書くこと（1）カ」（共有）の育成が重要であると考えた。

推敲において文章全体の構成や書き表し方などに注目して文や文章を整える力を身に付ける必要があるが、そのためには、発達段階に応じ、推敲の力を身に付けるための過程の積み重ねが重要である。

しかし、令和5年度「全国学力調査」において、約9割の教員は推敲の指導を実施したと回答しているが、令和4年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会）において、「自分が書いた文章を読み返し、分かりやすい表現になるように書き直している」、「他の人が書いた文章のよい点を取り入れて書くようにしている」に肯定的に答えた児童は7割に留まった。このことから、児童に推敲の必要性を自覚させ、その力を身に付けさせることが重要であることが明らかとなった。

そこで本研究では、「書くこと」の領域において、児童が目的を意識しながら課題に取り組める学習過程を工夫するとともに、児童が自分の学びにより、身に付ける資質・能力を自覚するための手だてを講じることで自分の考えが伝わるように書くことができるのではないかと考えた。

以上のことを踏まえて、研究主題を「自分の考えが伝わるように書く指導法の工夫」、研究副主題を「文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整える活動を通し

て」として研究を進めることとした。

II 研究の視点

本研究の目的は、文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整える活動を通して、自分の考えが伝わるように書くことができる児童を育てることである。文や文章を整えることについて、小学校学習指導要領では以下の指導事項を身に付けることができるよう示されている。

低学年：文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。

中学年：間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えること。

高学年：文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えること。

この力を育てるために、本研究では、次の二点の視点から研究主題に迫ることとした。

1 目的を意識しながら課題に取り組める学習過程の工夫

(1) 児童にとって目的意識や必要感のある単元設定

児童がすすんで書く活動に取り組むためには、誰かに自分の思いを伝えたい、よりよいものを書きたいという意欲が重要となる。そしてその意欲を単元の最後まで持続して取り組むことで、自分の考えが伝わる文章を書くことができる児童が育つと考えた。

そこで、本研究では、教材との出会わせ方を工夫した。単元のはじめに、児童にとって魅力ある単元のゴールを具体的に示すとともに、伝える相手や目的がより明確になるように設定した。また教師がモデル文を示すことで単元のゴールが具体的にイメージできるようにした。

さらに、児童とともに学習計画を立て、1単位時間に、どのような力を身に付けていけば単元のゴールを達成できるのかを視覚的に捉えられるようにした。この学習計画の内容を、推敲段階での観点と連動することで単元を通して身に付けさせたい力が児童にとって明確になると考えた。

2 児童が自分の学びを自覚できる工夫

(1) 学習の積み重ねが見える振り返り

自分の考えが伝わる文章を書くには、文の種類によって異なる構成や書き表し方を理解し、書くことができることが必要である。そのためには、本単元で身に付けたい力を、児童自身が自覚すること、身に付けること、適切に使えるようにすることが重要である。

そこで、本研究では、単元計画と振り返りを一目で確認できるような「振り返りシート」を活用している（3 検証資料）。各単位時間の目的に合わせためあてを設定し、めあてに沿った振り返りを書かせる。そのめあてと振り返りの積み重ねが学びの蓄積となり、児童が自分の学びを自覚できると考えた。

また、学習計画を児童と共有することで、児童が単元全体の見通しをもって学習するこ

とができる。構成段階において、情報の収集に戻る、記述段階において、構成に戻るなどの自己の学びの調整ができると考えた。

こうすることで、児童が自分の学びを自覚し、必要に応じて学びを調整するとともに、文種によって異なる構成や書き表し方を理解することにつながると考えた。

(2) 文や文章を整えるためのチェックシートの活用

書くことの学習過程において、文章を整える段階となる推敲を行うことは必須である。推敲の段階では、それまでの指導事項を理解し、活用できるようにすることが大切である。

本研究では、推敲が単なる表記の確認で終わらず、文章の内容面まで確かめられるように推敲の観点を明確にした。つまり、本研究における推敲の観点とはそれまでの学習において取り上げた指導事項である。2(1)で示したとおり、各単元で必要となる既習も含めた指導事項を学習計画に示し、それまでの指導事項を推敲の観点に取り入れることで、知識・技能の表記の訂正に留まらず、思考力・判断力・表現力等の指導事項まで含めた推敲ができると考えた。

また、児童が単元を通して身に付ける資質・能力を児童の立場に立ち、分かりやすい言葉で示すことで、児童にとって自分の考えが伝わる文章にするための観点が明確になり、相手に伝わる文章を書くことにつながる。

さらに、文や文章を整えるための推敲チェックシートの項目を具体的な文章で示すことで、児童が自分でどのようなことに気を付けて文章を確認することが必要であるのか、書いている文章の中でどのようなことを付け加えたり、省いたりするべきかを自覚することができると思った。その結果、自分の考えが伝わる文章を書くことができ、自分の文章のよいところを見付けることにもつながると考えた。このようにすることで、友達の記事を読む際にも、どのようなところを確認することが必要であるのかが分かり、友達の文章のよさにも気付くことができると考える。

III 研究の仮説

本研究では、前述した視点を基にして、3点の手だてを講じることで、文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整える力を身に付けることができ、自分の考えが伝わるように書くことができる児童が育つであろうと考え、以下の研究仮説を設定した。

<研究仮説>

「書くこと」の領域において、目的を意識しながら課題に取り組める学習過程を工夫し、児童が自分の学びを自覚するための手だてを講じることで、自分の考えが伝わるように書くことができる児童が育つであろう。

IV 研究構想図

共通テーマ 全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現

<p>【今日的な教育課題】 「令和4年度全国学力・学習状況調査」(文部科学省)の結果 ・領域ごとの正答率 「話すこと・聞くこと」 東京都 69.1% 「書くこと」 東京都 51.3% 「読むこと」 東京都 72.1% ●「書くこと」の領域に課題が多い。 ・「文章全体の構成や書き表し方などに着目して文や文章を整える力」を問う設問 (3一) 東京都の正答率 63.6% 東京都の無解答率 4.1% ・「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよい所を見付ける力」を問う設問 (3二 記述式) 東京都の正答率 39.0% 東京都の無解答率 17.4% ●小学校学習指導要領「書くこと」の指導事項 (オ) (カ) に課題。</p>	<p>【東京都教育施策大綱】 (東京都教育委員会 令和3年3月) 「文章の意味を正確に理解する読解力、授業で学んだ知識を活用して自分の頭で考え、その考えを表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し、新しい答えを生み出す力などを身に付けることが必要」 【小学校学習指導要領】 B書くこと(第5学年及び第6学年) ・(オ) 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えるとは、ア、イ、ウ、エの指導事項を観点に、文や文章の推敲することである。 ・(カ) 文章全体の構成や展開が明確になっているなどの観点から、自分の文章のよいところを見付けることに重点を置いている。</p>	<p>【実態】 令和4年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」(東京都教育委員会) ・「自分が書いた文章を読み返し、分かりやすい表現になるように書き直している。」 肯定的な回答率 4年：78.0% 5年：78.5% 6年：81.0% ・「他の人が書いた文章のよい点を取り入れて書くようにしている。」 肯定的な回答率 4年：75.2% 5年：76.2% 6年：79.2% 令和5年度「全国学力学習状況調査」 ・調査対象学年の児童に対する国語の授業において、前年度までに、互いの書いた文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることができるような指導を行いましたか。 肯定的な回答率(教員) 93.9% ●児童と教員との意識の隔たり</p>
---	--	---

《研究主題》

自分の考えが伝わるように書く指導法の工夫
～文章全体の構成や書き表し方などに着目して、
文や文章を整える活動を通して～

[低学年]

自分の思いや考えを明確にして文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりできる児童

[中学年]

自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にし、間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えることができる児童

[高学年]

自分の考えが伝わるように、文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えることができる児童

《研究仮説》

「書くこと」の領域において、目的を意識しながら課題に取り組める学習過程を工夫し、児童が自分の学びを自覚するための手だてを講じることで、自分の考えが伝わるように書くことができる児童が育つであろう。

研究主題に迫るための視点

視点1 目的を意識しながら課題に取り組める学習過程の工夫

- ① 児童にとって目的意識や必要感のある単元設定

視点2 児童が自分の学びを自覚できる工夫

- ① 学習の積み重ねが見える振り返り
- ② 文や文章を整えるためのチェックシートを活用

V 研究の方法と内容

1 基礎研究

「全国学力調査」、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会）や「東京都教育施策大綱」（東京都教育委員会）、「小学校学習指導要領」などを参考にして、「書くこと(1)エ・オ」（推敲）に関連付けられる力を分析した。

2 検証授業

低学年(第2学年)

- (1) 単元名 1年生を招待しておもちゃ祭りを開こう
～おもちゃの作り方ブックをプレゼントしよう～
教材名「おもちゃの作り方をせつめいしよう」

(2) 単元の目標

- 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。
〔知識及び技能〕 (2)ア
- 語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫することができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕 B (1)ウ
- 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすることができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕 B (1)エ
- 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

「学びに向かう力、人間性等」

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。(2)ア	①「書くこと」において、語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。(B (1)ウ) ②「書くこと」において、文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりしている。(B (1)エ)	①事柄の順序に沿って粘り強く構成を考え、学習課題に沿っておもちゃの作り方を説明する文章をまとめようとしている。

(4) 研究主題に迫るための手だて

ア 目的を意識しながら課題に取り組める学習過程の工夫

(7) 児童にとって目的意識や必要感のある単元設定

「馬のおもちゃの作り方」の教材を用いて、手順を示す文章の書き方を学び、本単元ではその説明の工夫を使って、実際に「おもちゃの作り方を説明する文章を書く」という言語活動を設定した。

これらは、生活科「あそんで ためして くふうして」の単元と関連させて指導する。まず、身近にある素材に触れ、遊びを発想したり、これらの素材を生かしたりして、動くおもちゃを作り、工夫して遊びを楽しむ。最初は様々な素材の感触を確かめ、転がしたり、積み上げたりして、それぞれの素材との関わりを深めていく。その後、「動くおもちゃ」の仕組みに触れる中で、作りたいおもちゃへの思いを膨らませたり、作ったおもちゃで楽しく遊ぶ中で、遊び方の工夫を重ねたりすることができるようになることを考えた。

学習の目的をより明確にするために、「1年生を招待しておもちゃ祭りを開こう」という単元のゴールを提示することで、1年生にも簡単にできるおもちゃを作ったり、楽しく遊ぶことのできるおもちゃを作ったりするという目的意識や相手意識が生まれるようにする。教師は、1単位時間のねらいを明確にしながら学習を進め、児童の書く意欲を高めていく。

イ 児童が自分の学びを自覚できる工夫

(7) 学習の積み重ねが見える振り返り

本単元では、おもちゃの作り方ブックを作るという単元のゴールに向けて、毎時間必要な力を身に付けていく。単元の学習の流れと1単位時間のめあてや振り返りが即座に確認できる「振り返りシート」を用意する。「振り返りシート」を用いることで、読み取ったり、書いたりしたことを通じて、児童が身に付いた力や課題を振り返って自覚できるようにしていく。毎時間の学習の中で、「できた」を積み重ね、自分の文章のよさに気付かせていくとともに、教師は毎時間振り返りシートの内容を確認し、児童の学習の様子やつまずきについて、肯定的な言葉をかけたり、必要な助言をしたりしていく。

(4) 文や文章を整えるためのチェックシートの活用

「推敲チェックシート」は低学年までに身に付けるべき観点を挙げた上で、さらに本単元における推敲の観点を6点に焦点化して作成した。表記についての推敲の観点を3点、内容についての推敲の観点を2点の合計5点とし、より単元の内容に沿い、児童にとって理解しやすい表現に置き換えて示した。また、第6の観点については、説明書を読みながら、おもちゃを作ることができるかどうかを推敲の観点到に設け、1年生が説明書を読み、おもちゃを作ることができるかを考える項目とした。

推敲の観点は、書くことのア・イ・ウの指導事項との密接な関わりがあり、推敲までの学習の着実な積み重ねによって身に付くものであると捉えている。低学年では読み返す習慣を付け、相手に伝わる文章になっているかを考えることが大切である。出来上がった文章を読み合うことで友達の文章のよさを見付けるだけでなく、友達の文章と比較することによって自分の文章のよさや分かりやすさに気付かせるようにしていく。

(5) 学習指導計画(8時間扱い)

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
一	1	○学習課題を設定し、学習の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生をおもちゃ祭りに招待することを知らせ、学習への意欲を高める。 ・単元のゴールがイメージできるようモデル文を提示する。 	
二	2	○説明するおもちゃを決め、必要な材料や道具を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・生活科「あそんで ためしてくふうして」での学習から、1年生が作ることができるおもちゃを選ぶ。 ・実際におもちゃを作り、必要な材料や道具、作り方を簡単にメモするよう指導する。 	〔知識・技能①〕 <u>ワークシート・観察</u>
	3・4	○選んだおもちゃの作り方の説明を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・説明する文章の組み立ては「はじめ」「材料と道具」「作り方」「楽しみ方(遊び方)」の四部構成とする。 ・「作り方」は、作業の手順の順序を表す言葉として、「まず」「つぎに」「それから」「さいごに」「これで」の言葉に注意して書くように指導する。 	〔思考・判断・表現①〕 <u>ワークシート・観察</u>
	5	○選んだおもちゃを説明する文章を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・困っていることは同じおもちゃのグループ同士で相談することで、考えが伝わるかを確認するように伝える。 	〔思考・判断・表現①〕 <u>ワークシート・観察</u>
	6	○おもちゃの説明書ブックを読み返し、推敲する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「推敲チェックシート」を用いて、個人、違うおもちゃの児童と推敲することで、考えが伝わるかを確認するように伝える。 	〔思考・判断・表現②〕 <u>ワークシート・観察</u>
	7	○推敲を基に、清書をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・推敲後の文章を整え、清書するように伝える。 	〔思考・判断・表現②〕 <u>ワークシート・観察</u>
三	8	○完成した文章を読み合い、感想を伝え合い、学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達が書いた文章を読み、工夫していると感じたところを見付け、友達に伝えるように促す。 	〔主体的に学習に取り組む態度①〕 <u>ワークシート・観察</u>

中学年部会(第3学年)

- (1) 単元名 食べ物のひみつブックを作ろう
 ～すがたをかえる食べ物を説明する文章を書こう～
 教材名「食べ物のひみつを教えます」

(2) 単元の目標

- 比較や分類の仕方を理解し、使うことができる。
 [知識及び技能] (2)イ
- 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる。
 [思考力、判断力、表現力等] B(1)ウ
- 間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確認めたりして、文や文章を整えることができる。
 [思考力、判断力、表現力等] B(1)エ
- 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。
 「学びに向かう力、人間性等」

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①比較や分類の仕方を理解し、使っている。(2)イ)	①「書くこと」において、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫している。(B(1)ウ) ②「書くこと」において、間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確認めたりして、文や文章を整えている。(B(1)エ)	①積極的に自分の考えと、それを支える理由や事例、情報と情報との関係について理解し、学習課題に沿って食べ物のひみつブックにまとめようとしている。

(4) 研究主題に迫るための手だて

ア 目的を意識しながら課題に取り組める学習過程の工夫

(7) 児童にとって目的意識や必要感のある単元設定

「すがたをかえる大豆」の教材を用いて、文章の組み立てや表現の仕方を学び、学んだことを生かして「食べ物が姿を変える過程を説明する文章を書く」という言語活動を設定した。教材の中で取り上げられている大豆は、理科の学習で扱ったこともあり、児童にとってなじみのあるものではある。しかし、加工食品が多くあることまでの知識は不十分であり、意外性をもって興味深く読み進めることができる。大豆以外にも姿を変える食品はあるのかという問いを立て、図書資料を通して様々な食品を知り、その不思議

議を学ぶことで、新しい知見に触れる驚きや面白さに興味をもつことができると考えた。食育という観点にも触れながら、児童が食べている給食と関連付けて、授業で学んだ「姿を変える食べ物」を給食中の校内放送で発信したり、図書室に展示ブースを設けたりすることを単元のゴールとして児童に示しておくことで、目的意識や相手意識が生まれるようにする。目的をより明確にするために、本単元の第一次において「食べ物のひみつブックを作ろう～すがたをかえる食べ物を説明する文章を書こう～」という単元のゴールを提示する。教師は、1単位時間のねらいを明確にすることで、児童の書く意欲を継続したまま次時へと学習をつなげていけるようにする。

イ 児童が自分の学びを自覚できる工夫

(7) 学習の積み重ねが見える振り返り

本単元では、食べ物のひみつブックを作るというゴールに向けて、毎時間に必要な力を積み重ねていく。児童が学習の過程を自覚しながら自己の学びを調整することができるように、単元計画と振り返りを一目で確認できるような「振り返りシート」を活用する。「振り返りシート」には、指導事項の観点を入れることで、中学年の段階から「書くこと」における学習の過程を理解できるようにする。記録した振り返りは、教師が毎時間ごとに確認をし、児童の学習の様子やつまずきに気付くことができるようにする。また題材の設定において同じ題材を選んだ児童の振り返りを比較した上で、互いの課題について解決できるように、対話ができる場を設定する。

(4) 文や文章を整えるためのチェックシートの活用

「推敲チェックシート」は、中学年で身に付けるべき観点を挙げた上で、さらに本単元における推敲の観点を焦点化して作成した。表記についての推敲の観点を5点、内容についての推敲の観点を2点の計7点とし、単元の内容に近い表現に置き換えて示した。また児童の実態に応じて、示した項目以外にも児童が自ら推敲の観点として加えたい内容を自由に記載できる欄を設けた。自分の文章のよさを相手に伝えたいという思いが実現できるようにするとともに、高学年で目指す内容の観点を意識した推敲へつなげられるようにした。推敲の際には、自分で推敲した後、同じ題材を選んだ児童同士が読み合う場を設定し、選んだ図書資料の内容からまとめた文章が読み手に伝わる内容になっているかを確認できるようにした。

(5) 学習指導計画(8時間扱い)

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
一	1	○学習課題を設定し、学習の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・「食べ物のひみつブック」を全校に発信することを知らせ、学習への意欲を高める。 ・どのような情報を集めればよいかをモデル文から考えさせる。 	

二	2	○題材に関する本を選び、調べて分かったことをメモに整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・図や表を使って、自分が選んだ題材について、工夫と食品に分けながら簡潔にメモに整理して書くことができるように指導する。 	[知識・技能①] <u>ワークシート・観察</u>
	3	○集めた材料について情報を整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・メモを基に、情報を整理しながらおいしく食べる工夫と具体例を結び付けてまとめるよう促す。 	[知識・技能①] <u>ワークシート・観察</u>
	4	○段落相互の関係に注意して、文章の構成を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・「初め」「中」「終わり」がつながりのある文章になっているか、対話を通して確かめるよう伝える。 ・「中」では、読み手が興味をもてるような書き表し方の順序となるように示す。 	[思考・判断・表現①] <u>ワークシート・観察</u>
	5・6	○構成メモを基に、記述(下書き)する。	<ul style="list-style-type: none"> ・二つのモデル文を提示し、書き表し方の違いに気付かせ、「初め」「終わり」の文章を工夫して表現することを意識付ける。 ・「中」の文章と組み合わせて、読み手に分かりやすい順序になるように気を付け、食べ物のひみつブックを作るよう伝える。 	[思考・判断・表現①] <u>ワークシート・観察</u>
	7	○食べ物のひみつブックを読み返し、推敲する。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達に知らせたい表現の工夫について、「推敲チェックシート」に書き足すことを伝える。 ・書いた文章は「推敲チェックシート」に従って推敲することを確認する。 ・「推敲チェックシート」を用いて、個人や同じ食べ物を選んだ友達と推敲することを確認する。 	[思考・判断・表現②] <u>ワークシート・観察</u>
三	8	○完成した文章を読み合い、書き方と内容について互いの文章のよいところを伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友達の書いた文章のよいところを見付け、全体で特によいと思ったところを伝え合うようにする。 ・学校図書館に展示して在校生からの感想を募り、自分の文章のよさに気付けるようにする。 	[主体的に学習に取り組む態度①] <u>ワークシート・観察</u>

高学年(第6学年)

- (1) 単元名 日本文化の魅力をホームページで発信しよう
 ～高畑さんの書きぶりを生かして～
 教材名「日本文化を発信しよう」

(2) 単元の目標

- 日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができる。

〔知識及び技能〕(3)オ

- 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)エ

- 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えることができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)オ

- 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

「学びに向かう力、人間性等」

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付いている。(3)オ	①「書くこと」において、引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(B(1)エ) ②「書くこと」において、文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えている。(B(1)オ)	①日本文化を発信するために、引用したり、書き表し方を工夫したりすることに粘り強く取り組み、見通しをもって文章にまとめようとしている。

(4) 研究主題に迫るための手だて

ア 目的を意識しながら課題に取り組む学習過程の工夫

(7) 児童にとって目的意識や必要感のある単元設定

『鳥獣戯画』を読むの教材を通して、表現の工夫を学び、本単元ではその表現の工夫を生かして「日本文化の魅力を発信する文章を書く」という言語活動を設定した。そのため説明的な文章を読む目的が明確になり、学習する必要感が生まれる。また、社会科「今に伝わる室町文化」の学習で、今も形を変えて残っている日本文化が多くあることを知らせるとともに、学級に日本文化に関わる図書資料を配置し、児童が必要とする機会に確認できるよう、環境を整えた。資料を探す際には、一人1台の学習者用端末を

活用した調べ学習が多いが、本のもつよさにも触れ、それぞれの特徴を理解した上で、本又はインターネットのどちらで調べるかを選べるようにする。自分で選択できることが児童の主体性を高める一助となる。また、今まで見過ごしていた日本文化の魅力に触れることで日本文化についての思いを、改めて膨らませた。

さらに、学習の目的を明確にするために、「日本文化の魅力をホームページで発信する」という単元のゴールを提示することで、目的意識が高まり、児童の書く意欲の向上につながると考えた。

イ 児童が自分の学びを自覚できる工夫

(ア) 学習の積み重ねが見える振り返り

本単元では、「日本文化の魅力をホームページで発信する」という単元のゴールに向けて、第1時で児童と教師の協働で学習計画を作成する。児童自身が学習計画の作成に関わることで、見通しをもって学習に取り組むことができる。

その学習計画を基に、単元の学習の流れ、1単位時間のめあて、振り返りが即座に確認できる「振り返りシート」を作成する。「振り返りシート」に、各時間に身に付けるべき指導事項の観点を入れることで、自己の学びの進捗を確認し、授業内で前時の内容に戻ったり、先を見据えて計画を変更したりと学び方を調整することができる。このように学び方を意識することで、自己の学びが明確になり、どのような力が身に付いたのかが自覚できると考えた。

本単元では、前単元の振り返りシートと本単元のワークシートとを両面印刷し使用した。そのため、「書くこと」の学習においても、前単元で、自分がどのような工夫を取り入れたいと考えたのか、事実と考えを区別するための文末表現にはどのような方法があるのか、などの振り返りを常に確認することができ、それまでの学びを生かすことができると考えた。

(イ) 文や文章を整えるためのチェックシートの活用

推敲する際の観点には、表記の間違いの確認だけでなく、「書くこと」における思考力、判断力、表現力等の指導事項が入ってくる。つまり、推敲までに行ってきた情報の収集や構成の検討、記述などの指導事項を児童が意識しながら書くことができたのかによって、推敲の質が変わってくると考えた。

本単元では、イ(ア)で述べたように児童の考えを生かしながら学習計画を立てる。このことにより、児童が単元のゴールに向けて、どのような力を身に付けていく必要があるのかを意識したり、書くことの力の高まりを実感し、書き進めたりすることができる。推敲する際の「推敲チェックシート」の観点も児童自ら作成することで、文章を整える観点が明確になり、自分の主張が伝わる文章に書き直していくことができると考えた。

本単元では、筆者の書きぶりを自分の作品に生かして書くことを目標にしている。筆者の書きぶりで特にまねしたい書き方については、「事実と考えの文末の書き分け」、「表現の工夫の効果」、「見出しと題名」、「主張に対する根拠の妥当性」の4点とした。全体で確認した書き方の工夫を「推敲チェックシート」に観点としても示すことで、表記の確認だけでなく、内容についても見直しを行い、文章を整えられるようにしていく。

(5) 学習指導計画(7時間扱い)

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
一	1	○学習課題を設定し、学習の見通しをもつ。 ○発信する日本文化を決める。	・学校のホームページで発信することを知らせ、意欲を高める。 ・モデル文を示し、単元のゴールに向けて、どのような力を身に付ける必要があるのかを共有する。 ・学習計画について児童と共に作り上げていく。	
二	2	○自分が書きたい日本文化について、必要に応じて詳しく調べる。	・参考資料となる情報の収集だけでなく、写真やグラフなどの資料、参考文献やURLの収集も行うことを確認する。	[知識・技能①] <u>ワークシート・観察</u>
	3	○筋道の通った文章になるように構成や展開を考える。	・部分ではなく、文章全体の構成を考えさせる。 ・情報の取捨選択の根拠を考えさせる。	[思考・判断・表現①] <u>ワークシート・観察</u>
	4	○自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して記述する。	・引用のルールを確認する。 ・筆者の表現技法を確認し、伝えたいことに合わせた表現技法を活用するように促す。	[思考・判断・表現①] <u>ワークシート・観察</u>
	5	○推敲の観点を決め、自分の文章を推敲する。	・単元計画を基に、推敲の観点を共有するように伝える。 ・自分の文章全体を見て推敲するように指導する。	[思考・判断・表現②] <u>ワークシート・観察</u>
	6	○文章全体を見てグループで文章を推敲する。	・「推敲チェックシート」(3 検証資料)を用いて、表記上の修正だけでなく、内容についても互いに推敲できるように指導する。	[思考・判断・表現②] <u>ワークシート・観察</u>
三	7	○友達と作品を読み合い、自分の文章のよいところを見付ける。	・友達の文章と互いに読み合うことで、目的や意図に応じた文章の構成や展開になっているかなどについて感想を述べ合い、自分の文章のよさを見付けるよう促す。	[主体的に学習に取り組む態度①] <u>ワークシート・観察</u>

3 検証資料（「振り返りシート」と「推敲チェックシート」）

8	7	6	5	4	3	2	1	
○/○	○/○	○/○	○/○	○/○	○/○	○/○	○/○	日
書いたせつめい書を友だちと読み合い、くふうしているところをつたえよう。	すいこうをもとに、せい書をして、本をしあげよう。	書いたせつめい書を読んで、文しように見なおそう。（すいこう）	「おもちゃの作り方せつめい書ブック」を分かりやすく書こう。（下書き）	一年生につたわるように、〈はじめ〉〈あそび方〉〈楽しみ方〉のせつめいのしかたを考えよう。	一年生につたわるように、おもちゃの〈作り方〉のせつめいのしかたを考えよう。	せつめいするおもちゃをきめて、ひつような〈ざいりようやどうぐ〉〈せつけい図〉を考えよう。	「おもちゃの作り方せつめい書ブック」を書くための学しゅうけいかくを立てよう。	学しゅうのめあて
「一年生がよんで分かるようにしたい」と思っただけの漢字や言葉を使わないようにしました。	単元のゴールまで持続した相手意識	さいしよに文を見なおすときはよむが早すぎたけれど、二回目はなおしたほうがよいところが見つかりました。何回もよむことは大切だと分かりました。	推敲のよさを実感	「まずは、「つぎに」、「それから」、「さいごに」を使って書くことを気をつけるようになって、しぜんと書けるようになりました。	学習内容の定着			ふりかえり（できるようになったこと）

⑥	⑤	④	③	②	①	
せつめい書を読みながら、一年生がおもちゃを作ることができましたか。	〈作り方〉は、〈まず つぎに それから さいごに これだ〉などのじゅんじよのことはちゅういして書いていますか。	〈はじめ〉〈ざいりようやどうぐ〉〈作り方〉〈楽しみ方〉または〈あそび方〉の4つのまとまりに分けて書いていますか。	ていねいな言葉（すてす。すます。）を使って、書いていますか。	文のおわりに、「」文の中の切れ目に、「」はうっていますか。	まちがえている字はありませんか。（ひらがながかたかなならったかん字・小さい「」や「ゆ」「よ」）	名前
						し分
						友だち

【すいこうチェックシート】：かくにんしたら、チェックを入れよう。

低学年の推敲チェックシート

- ・①②③：表記に関する事項を明記する。
- ・④⑤：第2時から第5時までの【構成の検討】【考えの形成・記述】の段階で、めあてとしていたことを明記する。
- ・⑥：第6時の【推敲】の段階で、友達に読みながら実際に作れるか試してもらい確認する。

表記に関するチェック項目が多い。内容に関しては重点的に指導してきたことを2点、読み手に伝わるかどうかについて1点を入れている。具体的なポイントを示すことで、文を見直す習慣を育成することを旨とした。

「第2学年児童の振り返りシートと推敲チェックシート例」

VI 研究の成果と課題

1 全体の成果と課題について

(1) 成果

- ・書くことの学習において、伝えたい相手や伝える目的、単元のゴールを意識しながら課題に取り組む学習過程を工夫することで、児童は「自分の考えが伝わる文章を書きたい」という意欲をもち、その意欲を単元の最後まで持続して取り組むことができた。
- ・「振り返りシート」や「推敲チェックシート」を活用することは、推敲する際の視点が明確になるため、児童が学びを自覚し、調整していく上で有効であった。

(2) 課題

- ・互いの文章を読み合う際に、友達の見解を基にして文章を修正しすぎてしまう場合があった。文や文章を整えるときは、最終的に自分でどうしたいかを考えるためにも、書いた文章を伝えたい相手や伝える目的に立ち戻り、児童の書く力を更に育てる必要がある。
- ・評価につなげるためにも、推敲した前と後で文章をどのように直したかが残るようにすることやどのように推敲することができればB評価となるのか、教師側の評価規準を更に明確にしていく必要がある。

2 各学年の成果

	成果
低学年	<p>○単元の導入において、「1年生を招待しておもちゃ祭りを開こう」という単元のゴールや相手、目的を明確にしたことで、児童が1年生に分かりやすくおもちゃの説明書を書くという見通しをもち、進んで学習する姿を見ることができた。</p> <p>○順序を表す言葉「まず」「つぎに」を意識して使うことができるようになった。」毎時間の学習の中で「できた」を積み重ねていくことで、自分の書く文章のよさに気付くことができた。</p> <p>○「推敲チェックシート」を用いることで、何度も自分の文章を読み返し、文字の間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすることができ、自信をもって清書を書く姿が見られた。</p>
中学年	<p>○「食べ物のひみつブック」を作り図書館に置いて全校児童に読んでもらうという単元のゴールを明確にして、学習を進めたことで、より多くの人に伝わる文章を書きたいという意欲をもち、学習する姿を見ることができた。</p> <p>○「推敲チェックシート」によって、児童は誤った表記を正すことにも意欲的に取り組むことができた。本単元で身に付けた内容について、他教科で書いた文章でも見返す習慣が定着した。また推敲を確実にを行うことで、自信をもって清書に取り組むことができた。</p>
高学年	<p>○「学校のホームページを通じて日本文化の魅力を伝える」という単元の目標を設定したことで、多くの人々に自分たちの書いたものを読んでもらえる可能性が生まれ、そのことが「書くこと」に対する意欲を高めた。</p> <p>○「振り返りシート」を「読むこと」と「書くこと」で両面にすることで、「問いかけの文を文章に使いたい。」「体言止めを使うと文章全体の印象を強くすることができるから大事なところで使いたい。」などの「読むこと」における振り返りを見返して、記述する姿が見られた。</p>

令和5年度 教育研究員名簿

小学校・国語

学 校 名	職 名	氏 名
荒川区立尾久第六小学校	主任教諭	奥村麻衣
足立区立千寿常東小学校	主任教諭	臂美沙都
武蔵野市立第二小学校	主任教諭	竹島由記
小平市立鈴木小学校	主任教諭	◎大畑裕一
狛江市立狛江第三小学校	主任教諭	中山美和

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課

指導主事 中嶋 康彦

令和5年度
教育研究員研究報告書
小学校・国語

令和6年3月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849